

大学野球の実践現場から見たスポーツパフォーマンス研究

藤井雅文

鹿屋体育大学

I. はじめに

本エディトリアルテーマである「純粋に実践現場に必要な情報」について、受け手が選手なのか、指導者なのか、プロスポーツ選手なのか、学生アスリートなのか、同じ指導者でも指導対象者はどの年代なのか等々、実践現場で置かれている立場や状況によって求める情報は異なると考えられる。筆者は、7年間鹿屋体育大学硬式野球部の監督を務めていることから、選手としてではなく指導者の立場から実践現場が求める情報について意見を述べさせていただく。

スポーツ指導の対象者は小中学生、高校大学生、社会人トップアスリートまで多岐に渡る。小中学生の指導者は、試合で勝つことよりも競技を楽しませながら競技自体を好きになることを優先に考える必要があり、高校大学生の指導者は勝利と育成の両方を天秤にかけながら指導に当たる必要がある。さらに、トップアスリートを指導対象とする指導者は、学生スポーツよりも高いレベルの専門性を身に着けたコーチング能力が必要とされる。

また、競技特性によっても必要とする情報は異なる。陸上競技や水泳などのクローズドスキル競技の実践現場では、選手が自分自身の身体動作に精密に向き合うことが重要であり、そのためのコツやカンを得られる情報や、数値目標を上げるためのトレーニング情報が重宝される可能性が高い。一方で、サッカーやバスケットなどの球技スポーツの実践現場においては、前述したコツやカンに加えて戦術面などのゲームを制するための情報を欲する傾向があると考えられる。

さらに、指導者内の立場によっても必要とする情報は異なると考えられる。例えば、自身が専門とする野球においては、試合中に指揮官となる監督は一人一人の細かな技術よりも、いかにチームが勝利する集団に近付けるかを優先的に考え、選手の技術力向上をサポートするコーチは一人一人の技術的な成長を最優先に考える傾向がある。つまり、野球の指導現場では、指揮官である監督は戦術や集団についての情報を求め、技術者であるコーチは選手個々のパフォーマンス向上のきっかけとなる情報を求めていると思われる。

以上のように、同じ指導者であっても本当に求める情報は、立場や環境によって大きくことなると考えられる。大学野球の監督という立場はかなり特殊であるが、7年間の自身の指導経験と様々な年代の指導者と話す中で感じる「本当に現場が求める情報」について2つの具体例を挙げて説明する。

II. 実践現場（野球の監督）が求める情報

○戦術の論文

野球の監督は、高い確率で指揮官として試合の采配を担う。従って、自チームの選手と相手チームの選手の特徴を把握し、試合で起用する選手を決定し、戦術を組み立てる必要がある。選手起用や戦術面については試合の勝敗に大きな影響を与えることがあり、全ての年代の指導者が悩んでいる事項である。しかしながら、これまでの科学的な知見としては、場面を限定して送りバントの効果を検討した

研究（及川ほか, 2011）など、多くのケースを平均化して扱った研究が主流であり、実践現場で既に分かっている情報が少なくない。そんな中、上平（2000）は、著書の中で戦術とは試合の流れやその時々状況を常に細心の注意を払って観察、分析し、さまざまな場面を予測して戦略面の修正を行いながら、最適の戦術パターンを確率的に選択していくことであるとしている。すなわち、指揮官である監督は、従来までの研究論文で報告されているような基本的な確率を理解したうえで、その場面に応じて戦術を選択することが重要となる。従って、ある程度の経験を有する監督は、従来の研究論文で発表されてきた基本的な戦術の確率論ではなく、実際の試合場面において選手起用や戦術を決定する要因について詳細に知りたいと推察される。例えば、ある場面での戦術決定の要因が、当該選手の調子なのか、相手選手の調子なのか、試合展開なのか、これまでの練習の背景からなのか、それら全てが戦術決定の要因に含まれると思われるが、どの要因の割合が強いのか多くの指導者が気になっている部分である。仮に、そのような試合場面を切り取った戦術面の深い考察が、スポーツパフォーマンス研究として世に発信できるのであれば、現場の監督にとって有益な情報になると思われる。さらに、指揮をする監督にとって、試合の振り返りを詳細にすることは、自身の戦術能力を向上させるためにも大変重要な過程になると思われる。当然、偶然の要素が多い野球戦術の事例については、研究論文として成り立たせるのは極めて難しいと予想されるが、是非とも戦術の事例研究が容認されるような研究機構になることを期待したい。

○チームマネジメント

野球部の監督にとってチームや集団をより良い方向に導くことは大きな役割である。個々への技術的な指導はコーチでも担うことができるが、チーム全体を管理・監督するのは監督者の大きな責務である。学生スポーツの監督は、毎年人が入れ替わる中で、試行錯誤しながらチーム作りに励んでおり、集団をより良い方向に導くチームマネジメントの情報は常に欲していると思われる。しかしながら、チームマネジメントの良し悪しについては判別が難しく、単純にチーム成績でその指導者のチームマネジメント能力の評価をすることはあまりにも短絡的であると考えられる。例えば、チーム成績以外にチームマネジメントの良し悪しを判断する指標としては、個々のスポーツ場面における予見段階、遂行段階、自己内省段階を循環させる能力「スポーツ版自己調整学習能力（幾留ほか, 2017）」や、集団構成員の所属先に対する有能感を示す概念の「集合的効力感（Bandura, 1997）」、集団構成員のまとまりやチームワークを示す際に用いられる概念の「集団凝集性（Carron, 1982）」などがある。筆者は、スポーツ版自己調整学習能力に着目して、高校野球を対象に自己調整学習能力を向上させるための指導スタイルを検討し（藤井ほか, 2019）、実際の大学野球チームで自己調整学習能力向上のための取組を紹介した（藤井ほか, 2020）。しかしながら、いずれの論文においても、根拠が薄いという査読者の先生方からの指摘によって自身の主張を削除せざるを得ないことが多くあった。実際の現場では、その主張に根拠があるかは大きな問題ではなく、実施した指導者にどのような狙いがあるか、その指導者や選手にどのような効果（実感）があったのかという本音が最も知りたい情報である。つまり、自チームをマネジメントする際に著書や研究論文を参考にする指導者にとっては、明確な根拠よりもその取組に興味を持ちチャレンジしてみたいと思うかどうかの方が重要である。また、チームを受け持つ全ての年代の指導者は、優勝などの結果よりも、そこに至ったチームの裏側（取組や経緯）を知りたいと口を揃える。このことから、

現場の指導者は、単に勝った負けたの結果だけでなく、その背景にはどのようなチームマネジメントがあったのか、表に現れない内部の詳細な情報を欲していると推察される。しかしながら、それだけでは研究論文ではなく単なる報告書のような形式になり兼ねないため、前述したスポーツ版自己調整学習能力や集会的効力感、集団凝集性といった指標を採用しながら進めていく必要がある。

実践現場の指導者が論文を作成するうえで問題となるのが査読に時間を有することである。現場の指導者にとって、自身の過去の取組について想起しながら執筆することは、頭の中が整理されて有効な内省活動となると思われる。しかしながら、現場の指導者は絶えず変化する情勢の中でチーム（選手）への関わりを最優先に考えて活動しているため、数カ月後の査読返答は大きな負担になると思われる。すなわち、数カ月おきに何度も過去の同じ場面を想起させられる行程は、進行中の指導現場を担う指導者にとって大きな足枷となっている可能性が高い。その問題を解決するために、例えば、事例研究の場合は査読方法を変化させるなどの対策を講じるのも一つの方法である。

Ⅲ. おわりに

実践現場で選手を指導し、チームをマネジメントしている指導者にとって、実践現場に有益な知見を提供する研究論文を作成することは大変な労力を要するため容易ではない。しかしながら、毎日現場で選手と向き合っているからこそ解決すべき課題を発見することができ、本エディトリアルで取り上げた「本当に実践現場に役立つための情報」に気付くことができる。これは、実践現場で指導活動をする研究者の最大の武器である。これからも、本誌のテーマでもある「実践活動に直接寄与する知見を提供すること」を目標に研究活動を続けていきたい。

Ⅳ. 参考文献

- ・ Bandura, A. (1997) Self-efficacy : the exercise of control. W. H. Freeman: New York, pp.477.
- ・ Carron, A. V. (1982) Cohesiveness in sport Groups: interpretations and considerations. *Journal of Sport Psychology*, 4 : 123-138.
- ・ 藤井雅文, 鈴木智晴, 村上光平, 前田明, 中本浩揮 (2019) 高校野球における自己調整学習能力と競技レベルの関係および指導スタイルの検討. *スポーツパフォーマンス研究*, 11, 208-223.
- ・ 藤井雅文, 鈴木智晴, 前田明, 中本浩揮 (2020) 自己調整学習能力向上を目指した大学野球部 4年間にわたる活動事例:PDCA サイクルに基づいた実践報告. *スポーツパフォーマンス研究*, 12:622-654.
- ・ 幾留沙智, 中本浩揮, 森司朗, 藤田勉 (2017) スポーツ版自己調整学習尺度の開発. *スポーツ心理学研究*, 44:16-17.
- ・ 及川研, 栗山英樹, 佐藤精一 (2011) 野球の無死1塁で用いられる送りバント作戦の効果について. *コーチング学研究*, 24(2):119~128.
- ・ 上平雅史 (2000) 日体大 V シリーズ野球.運動方法研究室(野球)編. 叢文社:東京, p.124.